高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.82

▲寅彦生前最後の論文「浅間山小爆発の二例に就て」（当館蔵）
浅間山爆発現場にたまたま居合わせた寅彦がその様子を報告したもの。最晩年の随筆「小爆発二件」もこの爆発を取り上げている。

リレー随筆

寅彦先生に学ぶこと

千葉 俊二

〈天災は忘れられたる頃来る〉――この寺田寅彦の言葉を決して忘れてはいけないだろう。忘れるとか、忘れないというのは、きわめて人間的な現象である。昔は人生五十年といって一世代を三十年として考えてきたけれど、世代が交代すれば、当然、私たちの記憶の伝承に断絶が生じる。現在は平均寿命も延びて、人生百年の時代を迎えようとしている。しかし、個としての人間の時間的スケールは、どれほど延びても百年を越えるということはないだろう。

人間の寿命がどれほど延びても、天災とよばれる自然災害が発生する時間的スケールに比べるならば、問題にならない。はやい話が、二〇一一年のマグニチュード9・0の東日本大震災は、八六九年の貞観地震以来の千年に一度の大地震だったといわれるが、どれほど人間の寿命が延びても、記憶を幾世代つないでも追いつかない。一九三三年に起こった昭和三陸大津波のときに書かれた「津浪と人間」にも、三十七年前の明治三陸大津波の記憶も充分適切なかたちでは伝わっていなかったことが指摘されている。千年前のこととともなれば、もはや「末の松山浪こさじ」の歌枕の伝承的な世界のことになる。

近年のめざましいテクノロジーの進展によって、昔には考えられなかったようなメディアも登場し、災害教育も大きく様変わりしてきた。南海トラフ巨大地震や首都圏直下地震が喫緊な問題として、ことさら危惧される今日、その対策についての意識も高まっている。が、テクノロジーの進展にともなって、寅彦先生がいうように「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する」（「天災と国防」）ことを知り、いっそう「正当に怖がること」（「小爆発二件」）を学ばなければならないだろう。

AIの精度の進展により、今日、いろいろなところでビッグデータの活用ということが話題となっている。備え有れば患い無し。いってみれば、ことわざも、古来からのビッグデータによる生きるうえでの生活の知恵だったといえよう。〈天災は忘れられたる頃来る〉という寅彦の教訓も、いまでは長い時間的なスパンを経ることによって、間違いなく立派なことわざとなっている。災害大国の日本に生きる私たちは、この教訓を片時も忘れてはならないだろう。

（早稲田大学名誉教授）

寅彦先生に学ぶ天災展

天災は忘れられたる頃来る

注目の企画展をご紹介します！

「天災は忘れられたる頃来る」の言葉で知られる物理学者・随筆家の寺田寅彦は、2018（平成30）年に生誕140年の記念の年を迎えます。

それを記念して開催される本展覧会は、天災をテーマにしています。「寺田寅彦先生の講義」に見立てて構成された本展覧会は、寅彦に親しんでいただきながら、現在にも通じる研究と警句を残した寅彦の研究や随筆を広く知っていただくことを目的としています。

01

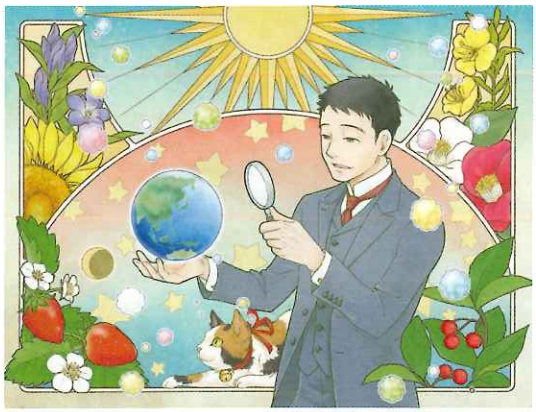
まずは、寅彦の人となりについてご紹介します。

お城や文学館の近くで少年時代を過ごした寅彦は、科学も文学もそれぞれ後世に残るすぐれた仕事を残しました。

それだけを聞くと何か近寄りがたいような気もしますが、甘党で猫好きなど意外な素顔を持っており、知れば知るほど親しみがわいてきます。

人間・寅彦の魅力や、県内の寅彦ゆかりの地などをパネルやマップでご紹介します。

また、今回素敵なイラストを描いて下さった漫画家の香日ゆらさんのご紹介もしております。



▲寺田寅彦イラスト／香日ゆら

02

次は、展覧会のかなめとなる、天災についての寅彦の研究や言葉を紹介するコーナーです。

寅彦は地震や津波など幅広い分野で研究を行いました。その研究は地すべりのおこり方、火の燃え方、地震の仕組みなど多くの分野にわたっています。

また、「天災は忘れられたる頃来る」をはじめとする寅彦の言葉は、今もなお私たちにいろいろなことを教えてくれます。

寅彦の言葉や研究を手書き原稿やタイプ論文、友人への書簡などを通してご紹介するほか、高知県の作家たちが残した天災を書いた作品もご紹介します。

▲寺田寅彦随筆「石油ランプ」原稿（当館蔵）

03

最後のコーナーでは、「もしも」の時について学ぶ高知県内の小中学校の取り組みをご紹介します。また、そこから学んだことを振り返れる参加型展示などを設置し、今後の防災を考えたいと思います。

最近寄贈された貴重な寅彦資料もあわせて大公開！ 家族にあてた書簡や初公開の寅彦の絵など、この機会にぜひご覧ください。

▲寅彦画色紙（新資料、当館蔵）

▲小宮豊隆あて寺田寅彦はがき（大正12年10月26日）
みやこ町歴史民俗博物館蔵

天災は、美しい景色や温泉、豊かな土壌などの恵みをもたらしてくれますが、その一方で自然の持つ大きな力からいかに身を守っていくか、ということも考えていかなければなりません。

寅彦の言葉が、今後の天災との向き合い方を考えていくきっかけとなれば幸いです。

（学芸課／川島禎子）

展覧会を盛り上げる多彩な関連企画も随時開催中！ 詳細は裏表紙のカレンダーをご覧ください。

9.15土▶11.4日

★観覧料 **400円**（常設展含む） 高校生以下無料／20名以上の団体は2割引
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県及び高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。

好評開催の企画展をご紹介します！

～デビュー35周年記念～

宮西達せNewワンダーランド展

ヘンテコリンな絵本の仲間たち

宮西達せさんの優しい絵本の世界へようこそ！

7月14日、宮西達せさんとこどもたちの元気な声とともに、宮西達せNewワンダーランド展が開幕しました！

14・15日はオープニングイベントを開催しました。14日のセレモニー後、宮西さんがゲストの子どもたちと一緒に大きなペイントボードにイラストを描き、その後、ワンダーランドクルーズ、読み聞かせ、サイン会を行いました。宮西さんは静岡・三島市より13日から来館され、企画展示室内の壁にたくさんのキャラクターイラストを描いてくれました。さらに、ロビーに設置しているQ&Aパネルにも、直筆で答えを書いてくれていますので、注目してくださいね！

企画展示室では、入ってすぐ正面にある「ティラノサウルス」シリーズのドーム型ジオラマがみな様をお出迎えします。ティラノサウルスやウマソウ、マイアサウラなどの恐竜たちが一堂に集まったジオラマは必見です！室内には、原画や手作りのダミー本、紙芝居などを展示しています。デビュー35周年を迎えた宮西さんの、初期の作品から新作にいたるまで約190点を、キャラクター型のあらすじパネルとともにお楽しみいただけます。

さらに、文学館初の試みとして、1階ホールをテレビ高知とのコラボルームとして展開しています。なかでも目玉となっているのは、絵が動き出す不思議な体験ができるコーナーです。ここでは、恐竜の塗り絵をご用意しています。4種の恐竜から好きな恐竜を選び、色を塗ると…恐竜が草原を駆け回る、ふしぎな体験ができます！ホール後ろ側には、ティラノサウルスのフィギュアも設置していますので、ぜひ一緒に写真を撮ってみてくださいね。

最後になりましたが、開催にあたり格別の協力を賜りました宮西達せさんに感謝申し上げますとともに、企画協力いただきました渋谷出版企画の皆さま、KUTVテレビ高知、円谷プロダクションをはじめご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

（学芸課／野々村昭美）

～デビュー35周年記念～ 宮西達せNewワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち

2018. 7.14（土）～ 9.2（日）

観覧料 500円／常設展含む 高校生以下無料　20名以上の団体は2割引

身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県及び高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。

※1階テレビ高知コラボルームは別途、入場料200円が必要です。（3歳児以下は無料）

©宮西達せ ©円谷プロ

常設展虫めがね

シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。
今年度は「反骨の大衆文学」コーナー・田中貢太郎、「現代の文学」コーナー・大原富枝、「近現代の詩歌」コーナー・浜田波静をご紹介しています。

展示作家紹介　大原富枝

本山町出身の作家・大原富枝は、高知県女子師範学校時代に喀血し、療養をしながら創作を続け、徐々に頭角を現します。病状は一進一退を繰り返し、次第に快復へと向かいますが、この青春時代に起きた、病気・愛する人との恋愛や別れ・戦争・死などが大原の人生にとって暗い影を落とすこととなります。以後一貫として、華やかで喜びに満ちた青春時代を体験することが叶わなかった辛い過去を重ねるかのように、大原は苛酷な人生を生きた女性たちを数多くの作品の中で描いていきます。

大原が47歳の時、代表作『婉という女』が誕生。この作品は、土佐藩執政・野中兼山の失脚により、4歳から40歳を過ぎるまで幽閉の身となった兼山の娘・婉が描かれています。野中家に対する刑は大変重く、野中家の男兄弟が亡くなり跡継ぎが絶え、赦免となった頃には婉を含む女姉妹が当時では子どもを身籠ることが難しいといわれている年齢となっていました。この作品は、大原の辛い青春時代と婉の約40年の抑圧された日々を重ねるかのように書かれており、「この作品を書くことで、私もいわば四十数年の女の生命を生き直した」と記しています。

今回は、作中で長い間囚われの身だった婉が密かに慕っていたとされる、土佐南学中興の祖・谷秦山あての書簡を軸装した資料（複製）を展示。本文と本文の行間にまで隙間なく文字が書き綴られているこの書簡からは、秦山あての書簡を書いては読み返し、さらに書き足しては読み返している婉の姿が想起されます。

大原は、「私にとって書くことは生きること」という言葉を残しています。この言葉には、〝療養生活中の体調が良い時に作品を少しずつ書き継ぎ、生きていることを実感した〟という意味と、過酷な人生を健気に生きていく女性を作品に描くことで、〝作品の中で追体験としてたくさんの女性の生涯を生きた〟という意味が込められています。この言葉と共に歩んだ大原の作家人生の軌跡をご覧ください。

（学芸課／檜垣佳甫）

▲展示の様子

トピックス
～「宮尾文学の世界室」より～

「宮尾文学の世界」室では、定期的に展示を入れ替え、宮尾文学を様々な角度からご紹介しています。昨年度からは「宮尾登美子の軌跡」と題し、第一部「『櫂』から『仁淀川』、その先の物語」、第二部「花開いた宮尾文学」、第三部　幕末維新博開催記念特別コーナー「天璋院篤姫」の三部構成で作家・宮尾登美子の軌跡と業績をご紹介しています。

第一部では、『櫂』から『仁淀川』までの作中の出来事をピックアップした年表を作成し、当時の時代背景や雰囲気が伝わる場面を引用してご紹介しています。歴史的事項や当時の風俗写真とともに作中の出来事を追いかけることで、作品をより深く知る手掛かりとしていただけたらと考えています。

また、2010年7月号の「yomyom」に掲載した「休筆のあとで」の中で、『仁淀川』の続きとして昭和28年からはじまり、昭和38年冬、南国には珍しい大雪が降った日に綾子が婚家を出るまでを書きたいと続編執筆への思いを記していました。

第一部の最後では、ついに作品として世に出ることのなかった自伝的四部作のその先の綾子を知る手掛かりとして、日記やエッセイを紐解き、作家への道を模索しはじめた宮尾自身に焦点を当ててご紹介しています。このコーナーで展示している「読書録ノート」は20代から30代の頃に読んだ書籍の記録が感想とともに書かれており、作家になる前の宮尾の読書歴を知ることができる貴重な資料です。

第二部では「花開いた宮尾文学」と題し、文学賞受賞作品を中心にご紹介。女流新人賞を受賞した「連」以後、10年の苦節の年月を経て、父母のことを描いた『櫂』で太宰治賞を受賞。その後は次々と大作を発表し、『一絃の琴』で直木賞、『寒椿』で女流文学賞、『序の舞』で吉川英治文学賞を受賞するなど、文壇に確固たる地位を築きました。「序の舞」や「平家物語」など大作の直筆原稿の分厚い束、そして美しく力強い筆致からは、作品にかけた情熱と思いが伝わってきます。

今回の展示ではご遺族のご協力を得て、文学賞受賞の度に知人から贈られた愛らしい珊瑚の数々や、愛用の品々を展示。素朴で品のある品々からは宮尾の人柄を感じることができます。

また、第三部では幕末維新博の関連企画として『天璋院篤姫』紹介コーナーを設け、新聞連載時の小市美智子挿絵の中から20点の原画を展示しています。始まりから終わりまでを原画で追っていくと、篤姫の表情が成長とともに変わっており、より物語を楽しむことができます。

「宮尾文学の世界」室は、今後も随時展示入れ替えを行い、様々な角度からより深く宮尾文学の魅力をご紹介していきますので、ご期待ください。

（学芸課／岡本美和）

追悼 猪野 睦さん

2018(平成30)年8月3日、詩人の猪野睦さんが88年の生涯を終えられました。

猪野さんは、1931(昭和6)年高知県香美市土佐山田町に生まれ、雑誌「蘇鉄」、「日本未来派」、「岩塩」などに参加し、詩人として活躍。

詩作の他にも、自由民権文学やプロレタリア文学、満州文学などにも精通された熱心な研究者でもありました。その知識は、広く、そして、奥深いものでした。

著書には、第32回壺井繁治賞を受賞した『ノモンハン桜』をはじめ『沈黙の骨』、編纂に『土佐プロレタリア詩集』、『沖縄詩歌集』『槙村浩詩集』などがあります。

詩人会議会員、「炎樹」「風土」同人であり、高知文学学校の運営委員長なども務め、高知の文学運動の発展に力を尽くされました。

また、1997(平成9)年11月、高知県立文学館立ち上げの際には、詩歌コーナーの専門委員として参画。

その後も、文学専門講座、文学カレッジ等の講師として、また、「高知の文芸同人誌展」などの展覧会の監修等、積極的に文学館に関わり、近年においては館報「藤並の森」の「土佐文学さんぽ」を連載執筆。

その一部は『土佐文学さんぽ』として、当館から発行し好評を博しています。

この歩みを振り返りますと本館とともにあった猪野さんの文学に対する深い情熱に、改めて感謝申し上げる次第です。

▲講義の様子

猪野さんは、年齢を感じさせないほど、フットワーク軽く、高知県内を駆け巡っていた、という感があります。内面の厳しさや激しさを包み込んだその笑顔は人を魅了し、皆から尊敬され、愛されていました。

猪野さんの訃報に接し、今はただ、喪失感のみが心を支配しております。

ご冥福をお祈り申し上げます。

(学芸課長／津田加須子)

▲「文学さんぽ」の執筆時には現地に赴き、調査・取材を欠かさなかった

※「土佐文学さんぽ」は今号はお休みします。

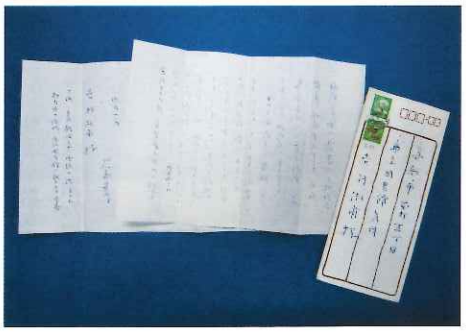
資料受贈報告

—寄贈資料から—

吉村淑甫(よしほ)宛 大岡昇平書簡

1984(昭和59)年4月1日付

封書・ペン書 吉村千穎(ちかい)氏寄贈



大岡昇平(1909～1988)は日本の戦後文学を代表する作家の一人。小説、評論、翻訳等、その仕事は多岐にわたりますが、土佐に関する作品に『天誅組』『堺港攘夷始末』などの歴史小説があります。

大岡は、1970年代半ばを中心に「『堺事件』の構図—森鷗外における切盛と捏造—」等、鷗外の歴史小説「堺事件」への批判を展開。その後、自らも堺事件※を題材に書いたのが『堺港攘夷始末』で、右の資料は、本作の執筆に取り掛かった大岡が、当時高知市民図書館に勤務していた吉村淑甫氏に宛てた書簡です。文中「疑問百出」とあり、高知に行き、吉村氏の教示を仰ぎたいこと、安岡章太郎とともに堺事件ゆかりの地を訪ね、現地の郷土史家に取材したいこと、仏語文献も多数収集していることなどが記されています。

吉村氏は高知の民俗・郷土史の研究で知られ、後に高知県立歴史民俗資料館の初代館長を務めています。この度ご子息の千穎氏より、本資料を含め14通の大岡昇平書簡をご寄贈いただきました。これらの書簡からは、大岡が吉村氏の協力を得て様々な史料・文献を収集し、堺事件に関する疑義を徹底的に検証、事実に迫ろうとした様が伝わってきます。

今回ご紹介した資料は、常設展企画コーナー「幕末維新の文学と歴史展」で展示しています。『堺港攘夷始末』は大岡の未完の遺作。この書簡は、生涯尽きることのなかった創作への意欲、ひたむきさを感じさせる資料です。ぜひ間近でご覧ください。 (学芸課／小松路代)

※堺事件…1868(慶応4・明治元)年、堺警備の土佐藩兵がフランス水兵を殺傷、外交問題となった事件。

受贈報告(平成30年4月～6月)敬称略

▼志村くみ子・「寺田雪子宛 寺田寅彦書簡」他
▼嶋岡晨・「午前13号 午前社編刊」
▼中脇初枝・「はじめての世界名作えほん1 ももたろう 中脇初枝文 山田みちしろ作画 ポプラ社刊」他
▼千浦孝雄・「さようなら 田中英光遺作集 田中英光著 月曜書房刊」他
▼千葉俊二・「文学のなかの科学 なぜ飛行機は「僕」の頭の上を通ったのか 千葉俊二著 勉誠出版刊」
▼河出書房新社・「夏目漱石、読んじゃえば? 奥泉光著 河出書房新社刊」他
▼清水博司・「久保栄・「新劇」の思想 祖父江昭二著 エール出版社刊」
▼末永昭二・「挿絵叢書 横山隆一 末永昭二編 皓星社刊」
▼前田樵・「青の欠片 前田樵著 ぶな工房刊」
▼笹岡さち江・「句集 桜の実 笹岡さち江著 朔出版刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

文学マイスター講座 後半が始まります！

4月からスタートした「文学マイスター講座」は、9月22日より後半が始まります。生誕140年を迎える寺田寅彦をテーマに、4月から6月までは、彼の生涯や科学者としての業績などを、3人の講師による講義で掘り下げました。

4月、当館学芸員・川島禎子による寅彦の生涯を中心にした講義を皮切りに、5月は高知大学名誉教授・鈴木堯士氏に、「科学者・寅彦」と題しての講義をいただきました。寅彦独特の観察眼と科学的思考法・怪異考と地鳴りについての科学的な観点など、専門的な内容を90分という時間にまとめていただいた講座はとても分かりやすく聴くことができました。6月の静岡県立大学教授の細川光洋氏による講義では、貴重な蔵書『妖魔詩話』（小泉八雲秘稿画本）をまじえ、化物の話を中心に、声や音に注目し、寅彦と八雲の共通性にも言及されました。八雲の描いた妖怪「古椿」や「船幽霊」などの独特の絵には、受講生のみなさんも興味深く見入っていました。

マイスター講座後半では、地震をテーマに実験も絡めて講義いただく回のほか、連句や花など寅彦の好きなものや、寅彦や寺田家ゆかりの地や歴史をご紹介する回など、寅彦の面影をたどっていただける内容で、全6回開催します（1月は企画展開催のため休会）。

講師も、寺田寅彦記念館の伊東喜代子氏や、小惑星「Torahiko」を発見した芸西天文学習館講師・関勉氏など、多彩なラインナップとなっています。

講座を通して、寅彦のことをより身近に感じていただければと思います。受講希望の方は、前日までに文学館までお申し込みください！（学芸課／野々村昭美）

▲講義の様子

平成30年度第21回児童生徒文学作品朗読コンクールを開催します！

文学館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいという願いのもと、毎年、小・中学生を対象に「児童生徒文学作品朗読コンクール」を開催しています。

今年で21回目を迎えるこのコンクールは、全県区を対象とした全国的にも珍しいもので、8月に県内3地区会場で地区審査を実施、そこで選出された児童生徒が11月11日(日)の県審査に進み、朗読発表及び公開審査、表彰が行われます。

また、県審査当日には、特別審査委員の先生よる記念講演会も開催されます。今年は、高知出身で児童文学者の横山充男先生を特別審査委員に迎え、記念の講演を行っていただく予定です。著作には、ふるさと高知県を舞台に描かれた作品も数多く、『四万十川物語　光っちょるぜよ！ぼくら』〈第24回日本児童文芸家協会賞受賞〉などがあります。

文学作品を朗読することが、より深く作品世界を理解するきっかけとなり、そこから得られた喜びが、さらに文学に親しむきっかけとなる、そのような機会を提供できたらと願って開催する朗読コンクール。毎年、生徒の皆さんの素直な心で表現される朗読により、会場は熱気に包まれます。

生徒の皆さんの素晴らしい朗読と、横山先生の記念講演会を、ぜひ聴きに来てください。

（学芸課／道脇夕加）

◆地区審査（公開）

- 西部会場（大方あかつき館レクチャーホール）
  8月20日（月）午前10時30分～
- 東部会場（田野町ふれあいセンター多目的会議室）
  8月24日（金）午前9時30分～
- 高知会場（高知城ホール　大会議室）
  8月27日（月）午後1時～
  8月28日（火）午前9時30分～

今年度の高知会場の場所は高知城ホールです。

◆県審査（公開）

会場：高知県立文学館ホール
日時：11月11日(日) 午後1時～

お問い合わせは朗読コンクール担当まで
（TEL：088－822－0231）

▲昨年の県審査に出場した皆さん

館内おはなしキャラバンに遊びに来ませんか♪

文学館では、毎月第1土曜日の午後2時から、カルチャーサポーターさんによる「館内おはなしキャラバン」を開催しています。場所は、文学館1階にある「こどものぶんがく室」。気候の良い時には、館を飛び出して、玄関前の木陰で開催することもあります。

開催中の企画展に関連した絵本の読み聞かせや土佐民話紙芝居の実演など、その時々のテーマで工夫しながらお届けしています。

館のボランティアであるカルチャーサポーターの皆さんならではの和やかで楽しいひと時。小さなお子様から大人の方まで、幅広く楽しんでいただいています。物語の中に引き込まれるような素敵な読み聞かせと紙芝居実演を楽しみに、文学館へぜひお越しください。

（学芸課／道脇夕加）

※今後の日程など詳しいことは、当館ホームページをご覧ください。

ショップより

当館には、企画展示や常設展示をご観覧に来られる方や、こどものぶんがく室に遊びに来られる方など、様々なお客様が来館されます。また、当館玄関前では、猫が日向ぼっこをしていたり、小鳥たちが自動ドアをつつきにきたり…なんとも賑やかな毎日を過ごしています。

最近では、ミュージアムショップのお買い物のみに来られるお客様も増えてきました。置いてある商品のほとんどは、当館オリジナルのものや、職員が厳選した商品で、こだわりがギュッと詰まったショップなのです。なかでも人気の商品が、本を読むときに欠かせないブックマーク。紙素材、螺鈿（らでん）細工、葉や扇・昆虫モチーフのものなど、豊富に取り揃えています。当館にお越しの際は、是非、ミュージアムショップでお気に入りのブックマークを探してみてください。

（総務事業課／妹尾佳奈）

館長室から

猛暑の夏に思うこと

岡崎 順子

30度を超えると、とんでもない暑さだと思っていた私の子ども時代。しかし、今年はいともあっさりと7月には35度を記録した。大音声で響く蝉時雨と、痛いような直射日光に照らされた8月を迎え、私たち大人は「毎日暑いね。」を挨拶代わりに、うんざりするような毎日を過ごしていた。

一方で、夏の主役は子ども達。そのエネルギッシュな動きに大人はついて行けない。文学館も夏の企画展は子どもが主役。今年の企画には恐竜やウルトラマンが登場したが、子ども達は見るだけではなく、自ら壁に向かって思い思いに、様々な形と色々な色使いで、自分だけの原画を描くのに熱中していた。

また、初めて挑戦した3Dの塗り絵など脇目も振らずに一所懸命。体験コーナーを含め、企画展の会場に子ども達の声が響くたび、いつの時代も変わらない「子どもの内なる力」を感じる。

残暑の中、「寅彦先生に学ぶ天災展」が始まる。寺田寅彦といえば「天災は忘れられたる頃来る」があまりにも有名だが、私は、寅彦が生徒にかけた「ねえ、君、不思議だと思いませんか」という言葉に惹かれる。なぜなら、その言葉には、子どのたちの内なる力を、さりげなくそれでいて説得力を持って科学に誘っているように思うからだ。

子ども達は大人からの思いがけないちょっとした言葉で、成長をする。

子ども達一人一人が持つ内なる力がやがて大きな推進力となり、子どもたちの前には様々な未来が広がるのではいかと、思い描くところである。

高知県立文学館ニュース　第82号　平成30年8月31日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー 9月～11月

企画展案内

寅彦先生に学ぶ天災展

天災は忘れられたる頃来る

2018（平成30年） 9/15㊏～11/4㊐

場所：企画展示室　観覧料：400円

記念講演会「いま、寅彦先生に学ぶこと」

『寺田寅彦随筆撰集 地震雑感 津波と人間』の編者であり、近著『文学のなかの科学　なぜ飛行機は「僕」の頭の上を通ったのか』で寅彦の科学と文学について書かれた千葉俊二先生にお話いただきます。

日　時●10月14日（日）午後2:00～3:30（開場 午後1:30～）
場　所●高知県立文学館1Fホール
講　師●千葉俊二氏（早稲田大学名誉教授）
参加費●当日観覧券が必要です。
申　込●電話または文学館受付にて事前申し込み。（定員100名）

サイエンスショー＆地震体験車に乗ってみよう!

地震の起こる仕組みや液状化現象など、天災に関する実験などをご紹介!

日　時●9月24日（月・振休）午後1:30～4:00（開場 午後1:00～）
場　所●高知県立文学館1Fホール
講　師●岡田直樹氏（高知みらい科学館）
共　催●高知みらい科学館
参加費●当日観覧券が必要です。
申　込●電話または文学館受付にて事前申し込み。（定員50名）

ランプシェードを作ろう!

寅彦の作品「石油ランプ」にちなんで、停電の時にも活躍するランプのシェードを作ってみよう!

日　時●10月28日（日）
午後2:00～4:00（開場 午後1:30～）
場　所●高知県立文学館1Fホール
参加費●当日観覧券+材料費300円です。
申　込●電話または文学館受付にて
事前申し込み。（定員30名）

朗読の会「寺田寅彦作品を読む（仮）」

当館カルチャーサポーターによる朗読です。

日　時●10月20日（土）午後2:00～4:00（開場 午後1:00～）
場　所●高知県立文学館1Fホール
参加費●無料　　申　込●不要

おはなしキャラバン「わくわくいっぱい、寅彦先生に学ぶ自然のふしぎ」

天災に関する紙芝居やミニ実験を行います。

日　時●10月6日（土）、
11月3日（土）
午後2:00～（30分程度）
場　所●高知県立文学館
1Fこどものぶんがく室
参加費●無料　　申　込●不要
協　力●寺田寅彦記念館友の会

紙芝居「つなみの朝」（文/市原麟一郎　絵/丸林友文）

クイズ・寅彦先生に挑戦!

正解数に応じてプレゼントあり♪

日　時●9月16日（日）、17日（月・祝）、10月7日（日）、8日（月・祝）、
11月3日（土）、4日（日）午前9:00～午後4:00
場　所●高知県立文学館2Fロビー
参加費●当日観覧券が必要です。　　申　込●不要

※展覧会の紹介をしています！
詳細は表紙・2ページ目をご覧ください。

次回企画展 予告

江戸川乱歩の華麗なる本棚

文豪ストレイドッグス × 高知県立文学館
BUNGO STRAY DOGS

平成30年 11月17日（土）～1月14日（月・祝）
（※12月27日～1月1日は年末年始のため休館）
場所：企画展示室　観覧料：500円（常設展含）

江戸川乱歩を中心に大人気作品「文豪ストレイドッグス」に登場する人物の文学作品や高知とのかかわりについてご紹介します。
11月18日（日）には平井憲太郎氏（乱歩ご令孫）による記念講演会も開催！

©2018 朝霧カフカ・春河35／KADOKAWA／文豪ストレイドッグスDA製作委員会

イベント情報

◆第21回 児童生徒文学作品朗読コンクール県審査（公開） 表彰式・記念講演会があります。
会場：高知県立文学館ホール（入場無料）
日時：11月11日（日）午後1時～
ゲスト：横山充男氏（児童文学者）

◆文学マイスター講座（参加無料・事前申込が必要 午後2時～開催）

【第4回】9月22日「寺田家と井口刃傷事件」（仮）
講師 片岡 剛 先生（高知県立高知城歴史博物館学芸員）

【第5回】10月27日「寺田寅彦と地震」（仮）
講師 大村 誠 先生（高知県立大学教授）

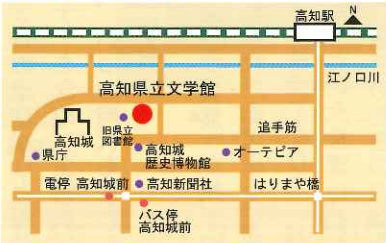
【第6回】11月24日「寺田寅彦ゆかりの地をめぐる」（仮）
講師 佐藤 元紀 先生（高知工業高等専門学校講師）

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、 精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者 健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、 茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bungaku.com

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「高知城前」下車、北へ徒歩5分または〈高知駅行〉「北はりまや橋」下車、徒歩20分
●JR高知駅下車、徒歩20分（または連絡バス・路面電車を利用）
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857